尾尻・八幡神社の例大祭

添田　悟郎

The regular festival of Ojiri - Hachiman Jinja

Goro Soeda

神奈川県秦野市尾尻に鎮座する八幡神社では、毎年 4 月 21 日に近い(21 日より前に来ない)日曜日に例大祭が執り行われ、八幡神社神輿と各自治会の子供神輿 5 基、さらに囃子の山車 2 台が尾尻地区(室町と大秦町を含む)を巡行する。尾尻の八幡神社(旧称八幡宮)は建久年間(1190～1198 年)には既に現在地である鶴壽山に祭祀され、尾尻・大竹・砂口三村の鎮守であったと伝えられている。八幡神社神輿は昭和 12 年(1937 年)に地元の建具職人であった高橋福氏により造営され、独学で学んだ高橋氏はこの神輿より神輿職人として認められることとなった。以下に平成 28 年(2016 年)4 月 24 日に行われた本大祭と、前日の宵宮の様子を紹介する。

Hachiman Jinja located in Ojiri, Hadano-shi, Kanagawa-ken holds its annual festival on the Sunday nearest to April 21; Hachiman Jinja Mikoshi and five children’s portable shrines which the each residents’ association owns, two floats for matsuri-bayashi parade through Ojiri area including Muromachi and Taishincho. Tradition says that Hachiman Jinja was already built during the Kenkyu era (1190～1198) on the current location “Tsurutoshiyama” and was the tutelary shrine for three villages ; Ojiri ; Otake ; Sunaguchi . Hachiman Jinja Mikoshi wsa made by Fuku Takahashi who was a native woodworker in 1937 (Showa 12). From this time, he was accepted as craftsman of the portable shrine. In this report, I introduce the festival “Hontaisai” in 24th April 2016 and its previous day “Yoimiya”.

１．八幡神社

尾尻の鎮守である「八幡神社」は「誉田別之命(応神天皇)」を祭神とし、境内には摂社の「津島神社」と末社の「御嶽社」が祀られている。創立年代は不詳であるが往時は「八幡宮」と称え、源頼朝の建久年間(1190～98 年)には既に現位置である鶴疇山(つるとしやま)に祭祀され、「尾尻」・「大竹」・「砂口」三村の鎮守であったと伝えられている。

図 1-1. 八幡神社

図 1-2. 社殿

図 1-3. 津島神社(摂社)

図 1-4. 御嶽社(末社)

天保 12 年(1841 年)完成の『新編相模国風土記稿』によると八幡宮は尾尻・大竹両村の鎮守で、社地は小丘にて「鶴疇山」と称した。神体は馬乗りの像で、本地三尊弥陀は鉄鏡に鋳出し、その傍らには建保 3 年(1215 年)9 月 16 日の日銘があった。天正 19 年(1591 年)11 月に社領三石五斗の御朱印を賜り、その頃に東照宮が当社に立ち寄り、神主屋敷内で休息されたと言い伝えられている。幣殿・拝殿・神楽殿が建っていて、末社には「春日」・「熊野」・「神明二」・「稲荷」・「御嶽」があり、「山王愛宕飯綱」を合祀していた。

八幡宮は鎌倉将軍の尊崇篤く相模三鶴八幡(鶴岡・鶴疇・鶴峯)の一つとされ、政子安産の祈願所とされたという。鶴岡八幡宮修理料寄進文書には、観応 3 年(1352 年)9 月 9 日に鶴疇八幡宮の氏子民が鶴岡八幡宮の建設ならびに修理料など、多額の寄進をしたことが記載されている。鶴疇山の八幡宮の本殿は明和 8 年(1771 年)の建立で、この棟札は大竹の嶽神社本殿に納められていた。

明治 6 年(1873 年)に八幡宮は八幡神社と改称して村社に列せられ、昭和 58 年(1983 年)11 月に現在の社殿が造営された。現在は秦野市平沢にある出雲大社が本務神社となっている。

２．大竹の分村と氏子離脱

尾尻から分村した大竹は正保国絵図(1645 年頃)にはないが、元禄国絵図(1697 年頃)にあることから、正式に分村したのはこの間であると考えられる。しかしながら、元文(1736～40 年)の頃の土人は一村の体制を続け、村高も分けることがなかった。そ

こで、かつての尾尻村の名主で指揮を執っていた者が既に分村していたことを知り、官へ訴えて村高を分けることにより完全に二村となったが、当時の二村の境界は錯雑していた。

大竹村は明治政府の一村一社制の指導により八幡宮の氏子を離脱し、新たに氏神を祀って嶽神社の氏子として独立した。明治5年(1872年)5月22日の議定書によれば、大竹村と尾尻村の氏子総代、立会人今泉名主「清水仙左衛門」、外名主2名、神主「草山兵庫守貞胤」等が熟議した結果、大竹村が離脱して八幡宮が尾尻村の総鎮守となったことが記載されている。

図 2-1. 大竹の嶽神社

図 2-2. 社殿

『中郡勢誌』では大竹について、尾尻に属していた当時、交通が盛んになるにつれてここに継立場が設けられ、ここを大駄家と称したとある。現在の住所は西大竹となっているが、これは伊勢原の大竹(現東大竹)と区別するために、位置からして伊勢原の方が東大竹と呼ばれていたため、秦野の方が西大竹になったという。

３．尾尻の歴史

3-1. 尾尻地区の変遷

旧尾尻村の区画は新たな町の成立によって分かり難くなっているが、尾尻の全域と南が丘・立野台・今川町・大秦町・室町の一部で構成されていた。現在の八幡神社の氏子範囲も複雑であり、尾尻・大秦町・室町のほぼ全域と、南が丘・今泉の一部が対象範囲である。なお、尾尻以外の南が丘・立野台・今川町・大秦町・室町は市街地の拡大や宅地造成によって新設された町名である。尾尻の小字名には「竹ノ下」・「臼井戸」、「下尾尻」・「坂下」、「大上」・「大六天」・「明星」・「尾崎」・「峯開戸」・「鶴巻」・「向原」・「八幡山」・「小原台」・「堀込」・「清水」・「西立野」・「大久保」・「上池久保」・「下池久保」があり、竹ノ下と臼井戸は現在の大秦町、下尾尻と坂下は現在の室町にあたる。

尾尻という地名の起因には伝説があり、諏訪明神の権化した蛇体の尾がこの地に横たわっていたという話が残っている。『中郡勢誌』には、尾尻村が中郡と足柄上郡との境をなす丘陵の尽きる所にあることから「丘(おか)の尻(しり)」という地形語を以って名付けられたとあり、「おか」は「丘処(おか)」であることから、その主要詞素である「丘(お)」に「尾」の漢字を宛て、接尾語の「尻」を付けて丘の末端の意味を表現していると表記されている。

『風土記稿』にある小名は「上方(宇陪、加太)」・「新田」・「寺ノ下」・「臼井戸」・「明星」・「鶴巻」であり、天保5年(1834年)の戸数は43戸であった。林は三ケ所あり、村内には幅九尺の小田原道が通っていた。曾屋村との北境には河原共に幅が約七十間の水無川(天谷川とも唱ふ)が流れ、幅が約三間の室川が尾尻村の北側を流れていた。また、清水が北方の臼井戸と南方の寺ノ下から湧き出ているとある。

昭和2年(1927年)に小田急急行鉄道の大秦野駅(現秦野駅)が尾尻に開設されてからは、駅北側の大秦町・室町・今川町・上今川町には商店や住宅地が増えて旧観をとどめていない。また、秦野駅南口の再開発が進んでいることもあり、尾尻や今泉の北部は大きく姿を変えている。南が丘は昭和50年(1975年)から住宅団地として開発され、平成17年(2005年)に西大竹尾尻特定土地区画整理事業が立野台として完成するなど、宅地造成によって西大竹や尾尻の様相が大きく変貌している。

現在の尾尻・大秦町・室町を合わせた自治会区分は、「上方町(うえがたちょう)」・「新田町(しんでんちょう)」・「臼井戸(うすいど)第1」・「臼井戸第2」・「八幡山(はちまんやま)」・「小原台(おばらだい)」の6つに分けられており、それぞれの自治会で会館(臼井戸は第1と第2で共有)を所有している。

3-2. 弘法の清水

臼井戸の清水(湧水)には水神石祠が祀られており、井戸の形が臼に似ていることから臼井戸という小字名になったと伝えられている。昭和60年(1985年)に秦野盆地湧水群が環境庁により「全国名水100選」に選定され、湧水郡の中で特に有名なのが弘法大師の伝説が残る「弘法の清水」である。水温は16℃前後で水量は日量100トン前後、現在も水をくみに多くの利用者が訪れる。

臼井戸の伝説には諸説あるが、湧水地主の代々の言い伝えによれば、おおよそ次のような由来となっている。夏の暑い日に弘法大師(空海)が農村に立ち寄り、妻女に飲み水を所望したところ、その場には水が無く、妻女は弘法大師の為に遠くまで水を取りに行った。弘法大使は感謝して杖を地面に差し込むと、地中から水が湧き出て来た。

図 3-1. 弘法の清水

図 3-2. 水神石祠

４．祭礼の歴史

例祭日は『風土記稿』では旧暦の8月15日で、『相中留恩記略』によると天保年間(1830～44年)には8月15日の祭礼に相撲興行が行われていた。天明8年(1788年)の「八幡神社昼相撲興行につき一札」によると、尾尻・大竹両村の若者が相撲をしたいからと、若者仲間から頼まれて総代が村役人に願い出て、表向きには許しがたいところであったが、たってということなので、宮本は元より三給役人には迷惑を掛けないことを条件に許された。例祭日は近年では4月21日であったが、現在は4月21日に近い日曜日に行われ、21日より前に来ない様に定められている。

現在の祭りは神輿渡御が中心で、神輿はお宮から宮立ちし、尾尻地区を渡御して宮入りするが、このようになったのは最近のことである。かつての祭りは神輿の渡御と青年団の有志による田舎芝居や素人演芸会が併せて行われ、その舞台づくりや出し物など

を準備する必要があった。場所は現在のイトーヨーカドー(大秦町2-16)界隈が中心で、約千坪ほどの広い公園となっていた。その中心に観音堂が祀られ、南隣に尾尻会館(青年会館)、南側に輿堂があり、公園の中心に銀杏の大木が聳えていた。この空き地に村民と青年団の奉仕で舞台小屋と太鼓の櫓が建てられた。完成した舞台は紅白の幕と提灯そして造花などで飾られ、祭礼当日になると露天商も出た。見物人は重箱にご馳走を詰め、場所取りで早くから集まって来た。一方、役者に選ばれた青年男女は相当前から練習を重ね、本番では化粧と衣装で役者作りが行われた。出し物は「国定忠治」や「勘太郎月夜歌」など、お涙ものが多かったようである。当時の青年団には女子青年団もあり、女性が花や飾りを作り、男性が神輿を担ぐ方を担当していた。

今では揃いの半纏で神輿を担いでいるが、かつてはそれぞれに派手な衣装を作り、顔には薄化粧をしていた。秦野駅前では今泉の近江屋酒店に担ぎ込んで振る舞い酒をご馳走になったり、昭和橋(現まほろば橋)を渡って本町分にまで担ぎ入れたりしていた。

イトーヨーカドー周辺一帯は梅原男爵の所有地であったが、昭和43～44年(1968～69年)頃にこの付近は整備され、神奈中ボールが建設された。その後は赤札堂と変わり、昭和54年(1979年)11月にイトーヨーカドーが開業した。さらに観音堂は寿徳寺の境内へ移転され、尾尻会館は各町内がそれぞれの自治会館を建設することで役目を終えた。その後、しばらくしてから輿堂が八幡神社の境内に移転された。なお、イトーヨーカドー秦野店は平成29年(2017年)3月に閉店となる。

５．宵宮

5-1. 準備

ここからは平成28年(2016年)4月23日の土曜日に行われた宵宮の様子を紹介する。例大祭の前日の宵宮では午前7時から青年会によって準備が行われ、神輿の振り掛けや山車の飾り付けなどが行われる。なお、山車の組み立ては太鼓の練習時間などを利用し、宵宮までには既に済まされている。神社の役員と自治会員は8時前から作業を始め、社殿や境内の掃除、祭壇の準備などを行う。全ての準備が終わるのは10時30分頃で、午後の宵宮祭までは一旦解散となる。

図 5-1. 山車の飾り付け

図 5-2. 神輿の振り掛け

図 5-3. 境内の掃き掃除

図 5-4. 社殿の拭き掃除

図 5-5. 祭壇の準備

図 5-6. 締太鼓の調整

5-2. 宵宮祭・御霊遷しの儀

12時55分からは社殿内で宵宮祭が執り行われ、出雲大社の神職により神輿へ御霊が遷される。

図 5-7. 宵宮祭

図 5-8. 御霊遷し

5-3. 発御祭・発御の儀

宵宮祭が終わると出席者は境内へ移動し、13時25分からは神輿の前で発御祭が執り行われる。

図 5-9. 供物の準備

図 5-10. 発御祭

5-4. 宵宮渡御

発御祭を終えると御神酒で乾杯し、青年会会長の一本締めで八幡神社を13時40分頃にお発ちする。神輿は最初に立野台を渡御し、南が丘1丁目にある氏子宅で休憩を取り、尾尻地区へ移動して八幡山と小原台の一部を渡御する。

図 5-11. 宮総代の挨拶で乾杯

図 5-12. 青年会会長の一本締め

図 5-13. 宮出し

図 5-14. ﾄﾗｯｸでの移動(立野台)

神輿は北へ移動して臼井戸第2、臼井戸第1、新田町を回り、

15 時 20 分頃に初代青年会会長宅に到着すると、夜の渡御に向けて提灯が取り付けられる。16 時 50 分頃になると同所で発御祭(発御の儀)が執り行われ、17 時頃にお立ちする。宵宮渡御の前半はトラックでの移動がほとんどで、神輿を差し上げる時のみトラックから神輿をおろして担いでいたが、初代会長宅では応援団体が集合し、ここからは終日まで全て担いでの渡御となる。

小田急線を渡って室町地区に入ると、直ぐに立ち寄った氏子宅の庭で宮出しから付けていた短い横棒を取り外し、長い横棒に交換する。その後は大秦町と室町との境を北へ進み、丸忠ビル前で神輿の提灯の火入れが行われ、山車の提灯もバッテリーで電球を点灯させる。

図 5-15. 提灯の取り付け

図 5-16. 発御祭

図 5-17. 横棒の交換

図 5-18. 提灯の火入れ

丸忠ビルを出発した一行はイトーヨーカドーの敷地へ入り、店舗前で神輿を差し上げる。その後は秦野駅の北口へ向かい、ロータリーを回って天狗寿司で休憩を取る。秦野駅は八幡神社の氏子範囲である大秦町に位置し、秦野駅を渡御できるのは尾尻だけとなっていることもあり、宵宮渡御の見せ場となっている。秦野駅の北口を出発すると尾尻地下道を使って小田急線を南側へ抜け、秦野駅の南口のロータリーを一周すると一の屋で休憩を取る。

図 5-19. 差し上げ(ｲﾄｰﾖｰｶﾄﾞｰ)

図 5-20. 秦野駅北口

図 5-21. 駅前で太鼓の披露

図 5-22. 秦野駅南口

秦野駅から移動してきた一行は 20 時頃に宮総代宅に到着し、敷地内に設けられた忌竹内へ神輿を納めて宵宮渡御は終了となる。担ぎ手は庭で軽食をとり、青年会は提灯を外した神輿にブルーシートを被せ、この日は 21 時近くに解散となった。

図 5-23. 宮総代宅に到着

図 5-24. 青年会会長の挨拶

６．例大祭

6-1. 準備と式典

ここからは平成 28 年(2016 年)4 月 24 日の日曜日に行われた本大祭の様子を紹介する。本大祭当日は青年会が朝 7 時に宮総代宅へ集合し、神輿の捩りを掛け直す作業などを行う。神輿の準備が終わると神輿をトラックの荷台へのせ、八幡神社へ向かう。

八幡神社の境内では 5 基の子供神輿が集まり、例大祭および発御祭(発御の儀)が執り行われる。式典後は子供神輿が 8 時 40 分頃にお宮を出発し、鳥居を出るとマクドナルド前で一旦子供神輿がおろされる。

図 6-1. 捩り掛け(宮総代宅)

図 6-2. マクドナルドへ移動

図 6-3. 例大祭式典

図 6-4. 子供神輿の宮出し

6-2. 本大祭渡御

お宮をお発ちした子供神輿がマクドナルド前に並ぶと、青年会会長の挨拶で大人神輿と共に 8 時 50 分頃に出発し、本大祭の神輿渡御が始まる。大人神輿と各自治会の子供神輿は、最初の休憩場所であるギフトショップしみずまでは合同渡御となるが、八幡山と臼井戸町、そして新田町は秦野赤十字病院入口の交差点で別れて地元地区へ向かい、さらにギフトショップしみずでは上方町と小原台の子供神輿が軽トラックへのせられ、それぞれの地区へ移動していく。

図 6-5. ﾏｸﾄﾞﾅﾙﾄﾞ前に集合

図 6-6. 合同渡御

ギフトショップしみずで休憩を終えると神輿をトラックへのせ、秦野中井 IC の近くにある南が丘公園へ移動する。南が丘との交流は昭和 63 年(1988 年)に車で渡御したのが始まりで、平成 7 年(1995 年)に南が丘側から神輿渡御の辞退があり、一時期は中断していたが、平成 24 年(2012 年)から再び交流を持つようになった。南が丘公園からは南が丘ウェルシー自治会と南が丘さつき東自治会の子供神輿との合同渡御となり、途中で南が丘ショッピングセンターでの休憩を挟み、みなみがおか幼稚園まで来ると合同渡御は終了となる。南が丘との交流を終えると神輿はトラックで移動し、最初の神酒所となる新田町で昼休憩を取る。

図 6-7. トラックで移動

図 6-8. 南が丘との交流

図 6-9. ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰで休憩

図 6-10. 新田町自治会館で昼食

午前中は南が丘での渡御が中心であったが、午後からは八幡神社の氏子地区を渡御していく。尾尻、室町、大秦町には合わせて 6 つの自治会があり、各自治会に設置されている神酒所にて御旅所祭が執り行われる。最初の神酒所である新田町を 12 時頃に出発した一行は初めに室町を渡御し、大秦町に入ると宵宮で神輿を一晩安置した宮総代宅で休憩を取り、臼井戸公民館横に設置された臼井戸第 1 の神酒所にて 2 箇所目の御旅所祭を執り行う。

図 6-11. 御旅所祭(新田町)

図 6-12. 御旅所祭(臼井戸第 1)

臼井戸第 1 の神酒所を 13 時 10 分頃に出発した一行は小田急線を渡って尾尻地区へ入り、臼井戸第 2 の神酒所にて 3 回目の御旅所祭を執り行う。その後は秦野駅方面へ向かい、セブンイレブンで長めの休憩を取ると、神輿は秦野駅の南側を練り歩き、上方町の神酒所で 4 回目の御旅所祭を執り行う。

図 6-13. 小田急線を渡る神輿

図 6-14. 御旅所祭(臼井戸第 2)

図 6-15. 神輿の差し上げ

図 6-16. 御旅所祭(上方町)

上方町の神酒所を 14 時 50 分頃に出発した一行は今泉台に入り、氏子宅で輿をおろすと、休憩時間の間に提灯の取り付けや締太鼓の増し締めを行う。提灯の取り付けを終えた神輿は 16 時 30 分頃に出発し、尾尻地区へ戻ると 5 箇所目となる小原台の神酒所で御旅所祭を執り行う。神酒所を出発した一行は八幡神社の境内の西隣にあるはちまんやま緑地へ向かい、敷地内で神輿をおろすと夜の渡御に向けて提灯に火入れを行う。

図 6-17. 提灯の取り付け

図 6-18. 御旅所祭(小原台)

図 6-19. 神輿を先導する山車

図 6-20. 提灯への火入れ

はちまんやま緑地を 17 時 50 分頃に出発した一行は八幡神社の裏手の住宅地を渡御し、八幡山の神酒所で最後の御旅所祭を執り行う。八幡山の神酒所を出発した神輿は休憩を取らずにお宮へ向かい、19 時頃にお宮の正面の鳥居から宮入りすると、参道を一気に進んで社殿前まで向かう。先導していた山車ははちまんやま緑地で太鼓を叩き、軽トラ山車は裏の鳥居から宮入りして境内で太鼓を叩いて神輿を迎える。神輿は境内で練ったのち社殿前で差し上げられ、輿をおろすと直ぐに神主により御霊が遷される。

図 6-21. 八幡神社裏を渡御

図 6-22. 御旅所祭(八幡山)

図 6-23. 鳥居から宮入り

図 6-24. 境内を練る神輿

図 6-25. 社殿前で差し上げ

図 6-26. 御霊遷し

6-3. 還御祭・還御の儀

神輿から御霊が抜かれると青年会会長により三本締めが行われ、2 日間に及ぶ神輿渡御が無事に締めくくられる。応援団体の担ぎ手は境内で食事を取り、青年会は神輿から提灯と振りを外す。社殿内では各団体の代表者が集まり、19 時 20 分頃から還御祭が執り行われる。青年会は応援団体の見送りを終えると、20 時頃に神輿を輿堂へ納める。その後は社殿内で直会を開き、最後に社殿の戸締りと境内の照明を消して解散となる。

図 6-27. 宮付後の三本締め

図 6-28. 還御祭

図 6-29. 応援団体の見送り

図 6-30. 神輿の片付け

本大祭の翌日の 4 月 25 日(月曜日)の午前中には残った片付けが行われ、太鼓保存会の反省会が 27 日(水曜日)、青年会の反省会が 29 日(金曜日)にそれぞれ催された。

図 6-31. 青年会の直会

図 6-32. 反省会(臼井戸公民館)

7．神輿

八幡神社神輿は「高橋福」の製作で、1 年半の歳月を経て昭和 12 年(1937 年)10 月に造営された。高橋氏は大正 12 年(1923 年)以降、建具造りなどで学んだ技術を活かして神輿の修繕を請負うようになり、さらにその解体修理で得た技術から神輿製作にも取り組むようになった。宮師(工匠)として初めて神輿を造ったのは大正 13 年(1924 年)の古峯(こみね)神社(秦野市曽屋)の子供神輿で、7 基目で尾尻の八幡神社神輿を造った。

八幡神社神輿には、高橋氏が大正 8 年(1919 年)から同 12 年(1923 年)まで東京の深川富岡八幡宮神輿 3 基など、数多くの江戸神輿を見たことが活かされている。高橋氏は師匠すなわち親方を持たない独学であったが、八幡神社神輿の桝組(組物)などは何代も続いた宮師の製作品と遜色のない出来で、この神輿より宮師として認められることとなった。神輿屋根部の降棟(野筋)は江戸型を模し、錺金具は浅草の職人が製作した。大鳥は重さ十一貫五百あり、高橋氏自身が浅草より秦野まで運んだ。また、彫刻師は秦野市元町(御門)の八坂神社と同様、中村贇雄師(後の平塚市の中村仏具店)が腕を振るっている。屋根の黒漆塗は蝋色(ろいろ)塗で、心柱(本柱)は露盤より基台(台輪)まで八寸角の柱を八角にして一本で通し、はなぜんで締めて固定している。よってこの縄も大鳥より蕨手、轅にかける振り(力綱)と同様に振りである。

八幡神社神輿は金千円で造られ(内五百円は錺金具代金)、造営時にかかる諸経費百七十円と合わせて千百七十円の金子(きんす)がかかった。なお、氏子の協力で欅の木材の提供を受けている。当時の神輿の仕上がり方は通常の倍の費用をかけたほどの値打ちがあると評価され、高橋氏はこれ以降昭和 60 年頃までの間に 34、35 基を新調あるいは修復してきたという。

造営後に担がれた神輿は戦争中はやむなく途絶えたが、戦後になって復興した。当時は「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声で担がれ、当日夕刻より夜に掛けては「明日はねぇぞ」の掛け声に変わった。神輿には提灯を付け(神輿造営当時より続けられる)、宮付け(宮入り)されたという。しかし、昭和 28 年(1953 年)頃にけが人が出たことにより大人神輿の渡御が中止となり、高橋氏所有のトラックに乗せられて巡行していた。昭和 57 年(1982 年)に「尾尻みこし保存会(青年会)」が発足し、翌昭和 58 年(1983 年)に再び担がれることになった。平成 18 年(2006 年)には部分修復であるが、鳳凰および屋根と台輪を茅ヶ崎神輿康にて修復した。

図 7-1. 尾尻の八幡神社神輿

図 7-2. 箱台輪下の墨書写し

図 7-3. 鳳凰(大鳥)

図 7-4. 飾り金物

図 7-5. 振り掛け後

図 7-6. 提灯取り付け後

大神輿(八幡神社神輿)の輿堂はかつて観音堂の横にあったが、八幡神社と御嶽社との間に移転し、更に昭和 58 年(1983 年)の八幡神社の社殿建て替えの際に、現在の津島神社の社殿横に移転された。

現在は担がれていないが、津島神社の社殿内部には八幡神社所有の中神輿と子供神輿 3 基が保管され、中神輿は女神輿として昭和 61 年(1986 年)から平成 18 年(2006 年)まで担がれていた。この中神輿の製作年代は大神輿よりも古く、昭和初期とされている。一方、八幡神社の子供神輿の内 1 基は平成 25 年(2013 年)までの 33 年間、八幡山自治会の子供神輿として担がれていたが、同自治会では平成 26 年(2014 年)から新調した子供神輿を担いでいる。

図 7-7. 輿堂

図 7-8. 中神輿と子供神輿

尾尻そして室町と大秦町には合わせて 6 つの自治会があり、それぞれ子供神輿を所有しているが、臼井戸第 1 と第 2 自治会は臼井戸町として子供神輿を共有しているため、合計で 5 つの子供神輿がある。また、南が丘での渡御では南が丘ウェルシー自治会と南が丘さつき東自治会の 2 基の子供神輿が参加した。

尾尻の神輿の担ぎ方は秦野市内で多く見られる「せり」で、住宅や店舗の前で神輿を差し上げる姿が印象的である。また、家の中に上がり込んだり、植木を散乱させたりと、荒々しい担ぎ方が特徴である。

図 7-9. 玄関前での差し上げ

図 7-10. 室内まで上がり込む

図 7-11. 多少の障害は乗り越える

図 7-12. 散乱する植木

8．囃子

尾尻の太鼓は一時期途絶え、昭和 48 年(1973 年)には太鼓のテープを流していたこともあったが、昭和 50 年(1975 年)の太鼓連の結成により復活し、現在では「尾尻太鼓保存会」によって伝承されている。祭礼中に演奏される曲は「マツリバヤシ」と呼ばれ、秦野市内で一般的に叩かれている神輿渡御時の曲である。この他には「ミヤショウデン」や「ジショウデン」なども伝わっているが、現在では祭礼中に叩かれていない。尾尻の囃子は「締太鼓 2 個」と「大太鼓 1 個」で構成され、戦前は笛が入っていたと言われるが、現在では伝承されていない。

図 8-1. 構成は締太鼓 2 個と

図 8-2. 大太鼓 1 個

太鼓の山車は昭和 58 年(1983 年)までは 1 台だったが、手持ちの木材で 2 台目の山車が造られた。なお、現在の 2 台の山車は平成 20 年(2008 年)に新調されたものである。神輿渡御では 1 台が神輿の先導役を務め、もう 1 台の軽トラック山車が最後尾に付く。山車が通れない道がある場合は別のルートで移動し、休憩が長い場合も神輿とは別行動で巡回する事がある。

図 8-3. 山車

図 8-4. 軽トラック山車

太鼓の練習は 3 月から始まり、例大祭まで毎週日曜日の 13 時から 15 時の 2 時間行われる。練習場所は八幡神社境内の社殿前(雨天の場合は社殿内)で、子供を中心とした練習となる。

図 8-5. 太鼓の練習

図 8-6. 大人も参加

9．むすび

尾尻の八幡神社はかつて同市西大竹と中井町の砂口も氏子範囲であったことを考えると、大変由緒のある神社であったことが推測できる。砂口と西大竹は既に八幡神社の氏子を離脱しているが、尾尻地区だけでもなお氏子範囲は広大で、全て神輿を担いで移動することはできないが、トラックでの移動と担いでの移動、双方ともに市内でトップクラスの渡御距離であることは間違いないと思われる。

昭和 2 年(1927 年)に大秦野駅(現秦野駅)が尾尻(大秦町)に開設されると、尾尻は急速な発展を遂げることになる。秦野駅を渡御できるのは秦野市内で尾尻の八幡神社神輿だけとあって、宵宮における駅前(南口・北口ロータリー)での渡御は大変な盛り上がりを見せている。

このように、尾尻は氏子範囲の変遷と急激な経済成長を伴い、祭礼の形態も大きく変化してきたことが想像される。このような

急激な環境変化の中で、祭礼を維持し続けることは非常に困難なことだと考えられるが、現在のような盛大な祭礼が斎行されている背景には、地元の高橋福氏が残した手作りの神輿の存在が大きく寄与しているのではないだろうか。

参考文献の中で尾尻神輿保存会(青年会)が発足 25 周年の活動の歩みとして作成した『灯火の美』は、一般的に出版されている書物ではないが、私が同会から個人的にいただいたものである。この中には尾尻のかつての祭礼の様子や、現在までの変遷の様子が詳細にまとめられており、尾尻の祭礼の歴史を知ることができる貴重な史料となっている。この文献からは尾尻の祭礼関係者が高橋福氏の神輿を大変な努力および苦労のもとで復活させ、八幡神社の由緒ある歴史と現在の立派な街並みに恥じない祭礼の形を築き上げてきたとを読み取ることができる。

今後も、この素晴らしい尾尻八幡神社の祭礼が末永く後世に引き継がれていくことを祈願したい。

作成 ： 2017 年 1 月

○参考文献

1. 『神奈川県中郡勢誌』　神奈川県中地方事務所　(1953)
2. 『新編相模国風土記稿　第三巻』　雄山閣　(1970)
3. 『尾尻八幡山　尾尻八幡山遺跡発掘調査報告書』　尾尻八幡山遺跡調査団　(1976)
4. 『秦野地方の地名探訪』　石塚利雄　(1980)
5. 『浜降祭と神奈川の神輿　第 34 集』　監物恒夫　(1986)
6. 『秦野市史　別巻　民俗編』　秦野市　(1987)
7. 『秦野市史　通史 2　近世』　秦野市　(1988)
8. 『秦野市文化財調査報告書 5　秦野の絵馬と奉納額』　秦野市教育委員会　生涯学習課　文化財班 (2002)
9. 『秦野市文化財調査報告書 6　秦野市の寺社建築』　秦野市教育委員会　生涯学習課　(2002)
10. 『発足 25 年活動の歩み　灯火の美』　尾尻神輿保存会(青年会)　(2005)
11. 『ふるさと秦野景観 100 選』　秦野市まちづくり推進課　(2006)